

1	言語
言葉の力をつけよう（音読3年①） 〔文語定型詩「初恋」〕	
名前	

★ 言葉を豊かにするために、優れた文学作品を音読しましょう。日本語の美しいリズムや言葉の美しい響きを感じ取ることができるでしょう。朗読や暗唱にも挑戦してみましょう。言葉の意味を想像したり調べたりして味わいをさらに深めましょう。

やってみよう

◆ 五七調や七五調など、決まった音数律をもつ文語の詩を「文語定型詩」と言います。文語のもつ独特の響きや定型の音数律の奏でるリズムを味わいながら音読してみましょう。

初恋 はつこい
島崎藤村 しまざきとうそん

まだあげ初めし前髪そ まえがみの
林檎りんごのもとに見えしとき
前にさしたる花櫛はなぐしの
花ある君きみと思ひけり おもイ

やさしく白き手をのべて
林檎りんごをわれにあたへしは エ
薄紅うすくれなゐの秋の実に イ あき み
人こひ初めしはじめなり イそ

わがこころなきためいきの
その髪かみの毛けにかかるとき
たのしき恋こいの盃さかずきを ズ
君が情なさけに酌くみしかな きみ

林檎ばたけ 島この樹したの下に
おのづからなる細道ほそみちは ズ
誰たが踏みふそめしかたみぞと とイタモウ
問いひたまふこそこひしけれ

《口語訳》

初恋 島崎藤村
まだ結ゆいあげ始めたばかりの前髪が
林檎の木の下の方に見えたとき
その前髪にさした花櫛の花ではないが
花のように美しい君だと思ったことだ。

やさしく白い手を差し伸べて
林檎を私に与えてくれたことが
薄紅に色付き始めた秋の実のように
あなたを恋しく思うはじめとなったのだ。
わたくしが思わずもらす恋のためいきが
あなたの髪の毛にかかる時
たのしき恋の盃を
あなたはわたくしへの思いやりでみたくて
くれたのだよ。（あなたのおかげで私は恋の
盃を手にし、恋に酔いしれることができた
のだよ。）

林檎ばたけの木の下に
自然にできた細道は
いったい誰が通ってできた細道かしらと
尋ねなされるあなたが愛しくてたまらない。

《読んだ回数》

